

■起

僕の名前は名乗るほどのものではない。僕の物語はたった三六四六文字で終わるものだし、僕の名前が物語に深く関わるわけでもない。重要なのは僕の名前なんかではなく、今日起きる春の訪れのことであるので、特に気にしない方向でお願いしたく存じる。

バスを降り、正門に立つと桜の花びらが落ちてきた。ふわふわと揺れる花びらを掴もうとして失敗しつつも、僕の心は桜と逆方向に浮かび上がっている。

「いい天気だなあ」

まっさおな晴天を仰ぎつつ、僕は軽い足取りで門をくぐる。

春。僕は高校生になった。ぴかぴかの一年生である。一緒の高校になった中学の友だちもおらず真っ白な状態からのスクールライフになる。高校名や僕のこれまでの過去についても、今回の物語で重要ではない。僕はそれなりにコミュニケーションが取れてそれなりには色々できるの、とにかく新しい学校生活や友だちを楽しみにしていたし、それなりに緩々と三年間を平和に穏やかに過ごしていたらなあと夢を見ていた。そう過ごす自信もそれなりにあった。あわよくば恋しちゃってジョカノが出来てウキウキウギウギになれたらなあ……なんて若干ヨコシマなことを妄想だけで済ませようとして入学式の会場とな

る体育館に向かおうとしたところからキーン「あー」

ハスキーで大きい声が聞こえて振り向くと、空からボールが落ちてきた。正確にはおそらくグラウンドから野球部が打ったボールが見事ホームランで高々と飛び上がりすぎて僕に向かつて一直線にジャストミート！ 的な感じで「あつ」と僕も声をあげて反射的に避けられるほどの運動性を恥ずかしながら僕は持ち合わせがなくコメカミにストライ「グッ」

そして僕はぼっくり死んだ。

■承

嘘ですごめんなさい死んでません。まだ承だし。

無事に生還はしたけれども、ぼっくり気絶していた僕は目覚めた。最初は視界がぼんやりしていたけれど、瞬きを繰り返すとコンクリートの天井が認識できるようになる。コンクリートづくりの校舎は中学校のときと大差ない。しかしまさか入学初日に保健室のベッドにお世話になるのは初体験だ。

「あつ」

ハスキーで前回より小さめの声が聞こえた。顔だけ横に向けると僕はぎよつとする。そこにはとびきり可愛い女の子がいらつしやつたからだ。ふわつとした黒髪は最近流行りのポブカット。なぜか上は半袖の体操着で下は残念ながら長ジャージ。心配そうな不安げな表

情の小顔。しかも男子が気になるアノ  
アレは大変ふくよかでドキがムネムネし  
た。

「うわっ、わ、わあっ」

びつくりと起きて起き上がろうとすると  
世界が回転した、っていうと少し格好  
良い気がする。正確には強烈な眩暈に  
僕は再び枕にインした。よく考えるとコ  
メカミがひどく痛い。

「ああ……」

「ま、まだ寝てた方がいいよ。重体じゃ  
ないって先生は言ってたけど、ボール激  
突しちゃったから」

おそろおそろの伸ばされた手が僕のコ  
メカミに触れる。ナチュラルすぎてびつ  
くりするのも遅れた。女の子の身体は  
小柄で一見おしとやかに見えるのに、  
触れた指は結構固く芯の持ったものを  
感じてまた驚く。

「ごめんなさい。私の打ったボールが当  
たったの」

あのジヤストミートはこの人の代物だ  
ったのか。びつくりが多すぎて書くのも  
憚られる。

「あなた新入生でしょう？ 入学式だっ  
たのにいきなりこんなことになってしま  
って、本当にごめんなさい」

「い、いや」

頭を深く下げられて恐縮してしまう。  
そうか入学式。壁時計の針は長短とも  
ほぼ十二を差していて、今頃教室で解  
散になっているか否かぐらいの時間だろ  
う。さっそくサボリやがった野郎になっ  
たわけか僕は。でも僕はそんなことも  
思い出さず、ふくよかな胸にドキがム

ネムネしているだけなのでこの女の子を  
責められる義理はない。

「というかこの言い草だとこの女の子は  
僕の先輩ってことじゃないか。僕のそれ  
なりのコミュニケーション能力でも、シユン  
と落ち込んで少し泣きそうな先輩  
を慰める方法が少ないぞ。」

「先輩……ですよね？ 女子野球部？  
っていうヤツなんですか」

「あ、う、うん」

「先輩のボールまじ凄かったですし。そ  
のえっと女の子なのにすげーなって思い  
ましたし。まじ強かったですし。この身  
で受けられたことが光栄っす」

それなりにボキヤブラリーはあるつも  
りだったけど全然そんなことなかった。  
あからさますぎてこつちが申し訳なる。  
冷や汗だらだらな僕に先輩はきよとん  
として、何度か瞬きして、まんまるの目  
をゆっくり細め、て。

「ありがとう、やさしいのね」

くちびるが小さく弧をえがき、  
世界の色が回転した。

## ■転

そんなまさかと思われるかもしれない  
いが事実なので仕方がない。先輩の笑  
顔が僕の視界に映った途端、僕の薄っぺ  
らい人工的な色がバツバツサと吹き  
飛び、まつさらな地面に花が咲き乱れ  
た。バラ、コスモス、チューリップ、その他

なまえがわからない花が次々と芽を出し茎を伸ばし蕾を開き花弁を開く。大きな風が花吹雪を起し強烈な花の香りが僕の身体の中まで吹きつける。そして僕の身体の全部をあとというまに吹き飛ばし僕の身体は沸騰してしまいそうなくらい熱くなり今にも溶けてしまいそうになり、「あつ」と言う暇もなく全てが変わる。

僕のそれなりの世界がそれなりじゃなくなるのがわかった。僕は出会ってしまったのだ。たった一瞬のことだけど、他の人から見れば笑うようなことかもしれないけれど、僕にとってはこの日が何よりも重要で何よりも大事で大切にしたいことになったのだ。僕の変わらないはずだった何かはたった今変わってしまった。

今日のことを僕は決して後悔しないだろう。どれほどチープでもどれほど愚かでもどれほど喜劇でも、僕は胸を張って言うだろう。僕はこの人に出会うために今までそれなりに生きてきて、これからはそれなりじゃない学園生活を送るだろう。

つまり僕は先輩の笑顔にフォーリンラブしてしまっただ。

「ぼっ」

「ぼっ」

頭の痛さも忘れ風の早さで起き上がり先輩の手を掴む。両手でがしつと掴む。先輩がぎよつとして僕の手と僕の顔を交互に見る。僕は無数の花びらの吹雪を受けながら声を乗せる。

「僕をあなたの人生のマネージャーにし

てください!!!」

## ■結

「そりゃ無理だろ」

「ですよね!」

結論だけ先に申し上げますと、もちろんお断りされました。ですよね。

運命の出会いを果たしたあの日、先輩は苦笑いで丁重に僕の求愛を断った。逆に受け入れてくれたら女神すぎて平伏すしかない。専属マネージャーはおろか、女子野球部で男子マネージャーを受け入れられるわけもなく熟考すればそんな猛者になる勇氣もなく。なりたけどなれない。かなしい。

『僕をあなたの人生のマネージャーにつてゴロ悪いし』

「やっぱりそこですかね」

「そこじゃねえよ」

見事に玉砕した僕は男子野球部に入った。先輩のボールも受け止めきれない貧弱な身体では先輩に認めてもらえないであろうと考えたからだ。先輩より力が強かったら切ないし。それに何より一生懸命になれるものが欲しかった。とにかく今はがむしゃらに何かをやりたい。べ別にグラウンドで練習してたら先輩がチラツと見えるときがあるからなんてそんな理由じゃないんだからね。半分嘘です。

なにはともあれ、あれから一ヶ月経ちつつも僕は今日も今日とて男子野球部の先輩に恋バナをしつつ腹筋でしご

かれるトレーニング中です。

「つ、つらくなつてきましたっす」

「まだ二十回だろお前貧弱すぎだろ一ヶ月でこの程度つてどんなだよ俺の教育が悪いと思っちゃうだろ悲しくなるだろ」

「面目ないです……」

と恒例の嘆きを入れつつあると、校庭を走っている女子野球部のみなさんが近くをグラウンドの近くを通った。速やかに先輩のお姿を探して発見する。揺れる黒髪がこれまた綺麗だ。奇跡的に先輩も僕の顔を見つけたようで、こっちに手を小さく振ってくれた。遠目でぼんやりだけどきつと笑ってくれている。嬉しくつて売れシツク手、僕は全力の笑顔で手を振り返す。すると男子野球部の方の先輩が僕の太ももの後ろをそれなりの力で蹴った。

「痛い！ すみません！」

「オラあと八十回」

「なんで倍に増えてるんですかあ」

抗議は受け入れてもらえず、仕方なく再び腹に力を込める。僕が恋した先輩の笑顔を思い出しながら晴天の空を見上げる。僕にホームランをぶちまかす力を持っているのに、花のような笑顔を浮かべる先輩。僕の世界を変えた先輩。人生なんてちよつとしたきっかけで百八十度回転するし、僕のこの物語はたった三六四六文字で終わってしまうけれど、僕の人生はこれからも続くし先輩とお付き合いですることやあわよくば結婚してマイホームを持つてしまおうかもしれない。誰が笑おうと、誰も見な

くとも、僕の人生は続いていく。先輩の延長線上に僕の選んだ道がある。僕はそれを誇りにスクールライフを満喫する。

先輩が僕を見つけて浮かべた笑顔が、ひどく嬉しそうで楽しそうなものだったことすら気づけない僕だけだ。

まずは腹筋をクリアして次のステージに進むべく、僕は全力で額を膝に持つていこうと必死になるのだ。

おしまい